

Ⅱ. アンドレーエフ 試論

————『獣の呪い』にみる都市像

金 沢 美知子

レオニード・アンドレーエフ（1871～1919）は、19世紀末から20世紀初頭にかけての十年程の間——それは丁度、ロシア文学界にモダニズムの波が押し寄せた時期であった——に、次々に話題作を生み出して、ロシアの読者大衆から熱狂的な支持を受けた作家である。彼の名声は国境を越えて同時代の諸外国に広まり、明治・大正期の日本の文学者にも少なからぬ影響を与えた。

しかし、アンドレーエフの名声はやがて凋落の一途を辿ることになる。『チェーホフから革命まで。1900-1917年のロシア文学』の中で、M. スローニムはアンドレーエフについて次のように述べている。

「大衆にとって彼はベストセラー作家であり、彼の本は毎シーズン、ヒットをとばした。このような異例の文学的好運は極めて不安定であった。今日アンドレーエフは殆ど読まれない。彼はロシアでも、又、かつてはかなり評判になった外国でも忘れ去られてしまった。彼の名声は華々しいものだった。だが、その一時の栄光にも拘らず、彼の名声は殆ど痕跡を留めていないのである。」⁽¹⁾

スローニムが指摘しているように、現在のアンドレーエフの作品の出版状況や、アンドレーエフ研究の現状を顧みる時、やはり、今日彼の文学が半ば忘れ去られているという印象は、拭うべくもない。⁽²⁾ 又、これまで、アンドレーエフの文学に関しては、（特に性と死のテーマを衝撃的な形で描写した）問題小説としての側面が強調されることが多かった。そして、このような主題の鮮烈さや話題性に目を奪われて、彼の創作上の個々の試みは等閑りにされがちであったようにも思われる。

しかし、アンドレーエフの文学の特質は、必ずしも煽情的な性の描写や凄絶な死の場面の叙述にのみ関わるものではない。彼の作品は〈現代文学〉として、幾つかの注目すべき点を有しており、それはより多面的に研究される必要があるだろう。

筆者は、このような作業の一環として、本小論で、

◇アンドレーエフの創作活動の充実した時期に執筆されており、⁽³⁾

◇表面上、主題の刺激的要素が比較的小さく、

◇しかも、現代人の生に深く関わる問題を扱った

作品である『獣の呪い』（《Проклятие зверя》）（1907）を取り上げ、そこに現われている彼の文学の特質について、考察を試みた。^{(4),(5)}

* * * *

1907年春に長い外国旅行を終えてロシアへ帰還したアンドレーエフは、ペテルブルグに居を定めて創作を開始した。彼の生活は決して幸福なものではなかった。⁽⁶⁾ それは、創作の苦しみに加えて、本来猜疑心の強い彼がペテルブルグでの都市生活の孤独によって深く傷心し、疲弊していたためでもあった。こうした作者の個人的事情を背景に、『獣の呪い』では、現代文明の象徴としての都市の問題が追求されているのである。

『獣の呪い』は一人称で叙述されたやや長い短編小説で、大きさの異なった十一の章より構成されている。ある特定の事件についての物語ではなく、語り手＝主人公の「私」の都会体験をフェリエトン風に綴ったものであり、又、散文詩の如き相貌をも有している。

物語は、「私」が恋人たる「彼女」と共に、住み慣れた田舎（即ち自然）を離れ、都市^{まち}へ移り来るところから始まる。「私」は自然を愛しつつも、都会への強い憧憬を振り払うことができない。「私」は都市を恐れながら（Я боюсь города），その魅力に呪縛されており（вдруг очарует меня далёкий город），遂に恋人の反対を押し切って、都市へ出かけてゆく。やがて、都市に着いた「私」は恋人を街はずれのホテルに残して、単身市街へ赴く。だが、都市を観察し、発見してゆく中で、「私」の素朴な歓喜は次第に不安にとってかわられる。そして、この不安は種々の光景に触れて膨脹し、あらゆる事件を通して深まってゆく。最後に、動物園を訪れ、そこで病んだ海豹の人を呪うが如き悲し気な叫び声を聞いて、「私」は都市の実体を理解するのである。

それでは、都市^{まち}は主人公の「私」の前にどのような姿で現われているのであろうか。

まず、『獣の呪い』に於て、都市は、人間（住人）と各種の建造物（窓、扉からレストラン、動物園に至る）の集合として示されている。そして、建造物が、本来その制作者であり、主人公である筈の人間を威嚇し、惑乱させるところに、この都市像の特徴がある。「私」も又、壁に追い詰められ、街路に囚われ、動物園によって脅かされるのである。

又、都市は種々の相反する相貌を合わせもっており、その多様で可變的な性格によって「私」を悩ませている。例えば、都市はレストランや街路の雑踏の中に陽気な音色を響かせているが、この同じ場所に孤独で陰気な顔を覗かせもする。又、「チョコレートとココア」の看板に象徴される、明快な馴染み易い都市の空間は、突如、その不可解な悪夢の如き無限性で「私」を圍繞するのである。

そして、この作品の都市像を最も大きく特徴づけているのは、都市内部の細胞（即ち、都市の道具立てである住人や建造物）が孰れも似通っていて、独自性を喪失していることである。

『獣の呪い』には夥しい数の扉、壁、家が登場するが、それらは皆類似していて区別がつかない。これらの建物を抱えてむ街路も又、各々の固有性を持たず、通行人たる「私」は進むにつれて行く手を見失い、迷路の奥深くに閉じ込められてしまう。

扉はたくさんあるが、出口はない。——人間達が幾重にも設けられた石の檻の中で棲息している、あの都市^{まち}へ入る度に、私の心はそう感じる。何故ならば、それらの扉は偽りだから。ひとつ開けると、その向こうにも又ひとつある。それを開けるとその又向こうにも、次々に続いているのが見える。都市^{まち}中何処へ行こうか、至る所に、扉と扉を出入りする欺かれた人間達を見るだろう。(7)

私は既に一時間も歩いていたが、街路^{みち}はいつ果てるとも知れなかった。丁度、その始まりが定かでなかったのと同じように。それは纏れた糸球に似ていた。巨大な猫が弄ぶ、大きな纏れた石の糸球に似ていた。<…中略…>かくも夥しい数の窓と扉のある、これらの錯綜した街路^{みち}の中に、私は虚偽を認めたのである。(8)

このような悪夢は、単に建造物を通してのみ発生するのではない。他ならぬ「私」自身が、群れなす都市の人間達の中で、自己の独自性を保持し得ないのである。この現象は既に、主人公が恋人と共に都市を訪れる時点から始まっている。

実のところ、私はその間ずっと、彼女のことを忘れがちだった。それに、彼女は幾分疎々^{よそよそ}しくなったようでもある。我々を含むこの夥しい数の人間、男達と女達が、我々二人を引き裂き、彼女を薙

薔の帽子を被った全ての女達そっくりに、又、私を黒い帽子を被った全ての男達そっくりにしてしまうかのようだ。何故私が彼女に「君」(Ты)と言ひ、彼女が私に「あなた」(Ты)と言うのか、時折不思議な気さえる。⁽⁹⁾

都市の雑踏の中に身を置いた「私」は他の人々と自分が極めて似通っていることに気付く。

私は否応なく、他の人間、群集の行動と挙措を反映するばかりであった。私はそれを二倍、三倍に増殖し、果てしなく繰り返したのである。⁽¹⁰⁾

他の人間達との類似は、最初、素朴な歓喜の情で「私」を満たした。

一時間か、恐らくそれ以上の間、私はいつになく楽しい心持ちを味わった。私は皆と似ている、皆も私に似ている、私も又、この栄ある偉大な家族の一員なのだ——こう考えて、私は一種、家族の誇りの如きものを覚えたのである。⁽¹¹⁾

しかし、やがて「私」の中に不快の感情が芽生え、それが「私」の心を占領し始める。群集との類似の楽しさはいまや決定的に失われてしまった。そして、自己が群集の分身であり、コピーでしかないことが、「私」を深く傷つけ、不安に駆り立てる。

次第に不快なことが起こり出した。この不快は、私が喜ばしく思っていたそれらの共通性、類似性が、私が望んだ以上の、いささか深刻なものになり過ぎたせいであった。〈…中略…〉自分が随分前から無意識のうちにこなってきた一連の細ごまとした挙動に、今漸く気がついてみて、私は即ぐに悟ったのである。私の意志や欲望は自立性がなく、他の人々の意志と欲望に大きく支配されていることを。又、私は既に、私と同じ身装りをしている人間を一人、二人、三人までも見た。全く同じ帽子、同じ地の衣服、同じ靴を身につけ、そして、我々皆がボタン穴に薔薇をさしている。又、私は既に、私の顔にそっくりの人間を一人、二人、三人までも見た。——となると、もはや、私の衣服は私のものではない。私の顔も私のものではない。私の意志も、私の欲望も同じことである。以前は私の意志、私の欲望であったものが、今はボタン穴の薔薇同様、我々のもの、共通のものなのである。⁽¹²⁾

それから、多分汽車だったろう、ある車両の中で私はひとつの極めて不愉快な出来事に遇い、少々驚いてしまった。私が坐っていると、どこかの紳士、山高帽を被って、口髭を少量たくわえたごくありふれた感じの紳士が向かい側の席に腰を下ろした。その男はビロード襟の黒っぽい外套を着用し、茶色の手袋をはめ、銀の柄のステッキを両手で握りしめていた。私は店でこういうステッキを度々見たことがあり、ある時、自分用に買い求めた。私はこの男についてこれ以上詳しく描写することはできない。彼は全くありふれた男だったからである。一分か二分程の間、私は窓の外を見ようと、顔を外らした。我々は果てしなく、広い道路を飛んで行くようであった。と、再び振り返った時、男の傍にもう一人、どこからどこまでそっくりの紳士が坐っているのを見て、私は一瞬愕然とした。それは在来たりの類似(сходство)などではなく、まさに一致(тождество)であった。一人から二人への摩訶不思議な変化であ

り、幽霊を想わせる奇怪な鏡の映像であった。二人は全く同じ様子で坐ったまま、無論、何か同じひとつのことを考えていた。この男も、もう一人の男も、どちらも、両手は銀の柄のステッキの上に置かれていた。嗚乎、だが私も又、同じようなステッキを持っているのだ！ 何よりも恐ろしく、不可解だったのは、本人達も、別の人間も、ひとりとしてこの摩訶不思議な一致に気付かず、皆平然としていることだった。⁽¹³⁾

都市の各所にこれらの分身達を発見することによって、「私」の都会観は次第に変貌してゆく。「私」は都市に邪悪なものを嗅ぎとって、肉体的な苦痛すら覚える。都市のこの邪悪な相貌は、とりわけ第五節に於て、〈耐えがたい暑さ〉のイメージを通して明確化されている。

酷く暑かった。私は既う随分前から、炎熱の都市のこの苦しく果てしない暑さを感じ始めていた。⁽¹⁴⁾

私が聞いたところでは、この都市で人が暑さの為に——熱帯地域のように太陽の為ではなく、どこか部屋の中や物陰で——死ぬらしい。突然息苦しくなり——突然、何故か息が詰まる。そして、その人間は死んでしまう。心臓が止まったのだ。だが、太陽はこの殺人には何の罪もない。⁽¹⁵⁾

いまや、都市は「暑さ」で人を「殺害」するとまで表現されている。こうして、他者との全面的な（分身の如き）類似の中で、主人公の特性は確実に見失われてゆき、それと並行して、都会の魔性が露呈するのである。

作者は相互に似通った都市の人間達、及び彼らの中で独自性を失った主人公の姿を描く為に、物語に二つの挿話を導入している。

そのひとつは、動物園で、老いて病んだ海豹が絶叫する、次のような場面である。

と、その時、海豹は再び渾身の力を籠めて、その聞いたことのない荒々しい叫び声をたてた。私は即ぐに、彼が呪っていると解って、言い知れぬ恐怖に全身寒気を覚えた。巨大な都市の真中の、泥に塗れた盥の^{ねぐら}罎に突っ立って、彼はこの都市を、人間どもを、天を、地を、獣の呪いで呪っている。⁽¹⁶⁾

主人公の「私」は、この獣の呪いが、都市の人となってまだ日の浅い自分、都市生活によって疲弊、憔悴している自分にも向けられていると感じて、深く苦しむ。

「僕は獣の呪いが怖い。何故あいつは僕を呪ったのだろうか？ いったい何故？ この世がこんなにも悪いからといって、果して僕に罪があるだろうか？ 僕が生を受けた時、この世は既うこうだったのだ！ 僕が死ぬ時も又、こうだろう。僕の生など、実に、短い、無力なものなのだ！」⁽¹⁷⁾

「私」のこの苦しみは、物語の末尾近くに配された挿話の中にも描かれている。「私」と恋人が夜、街端れの森で親密に愛を語らう場面を、ひとりの男が秘かに覗いた。それに気付いた「私」は、逃げ去る男の後姿から、彼が「まるい山高帽を目深に被り」、片手で「光った銀の柄のステ

ツキ」を握っていることを知る。「私」は駅で男の姿を探し求めるが、男の姿は都市の全ての人間達と余りに似通っていて（山高帽と銀の柄のステッキは都市の人間の象徴と化している）、見分けることができない。

「 駅に着いた。大きな電灯のついた例の駅だ。多分、あの男もここに居るだろう。列車を待ちながら、山高帽にステッキの、同じ恰好をした紳士達の間を歩き回っているのだ。」⁽¹⁸⁾

しかも、これまでの引用箇所からもわかるように、男の姿、即ち都市の人間の姿は、「私」自身の姿にも酷似している。「私」と男の間の類似故に、「私」と恋人たる「彼女」は幾分疎遠になりさえする。

「 彼女の声に刺々しい調子と、私の腕に寄りかかった彼女の冷びえとした態度で、私には解った。彼女はその女心の奥底の方で、見知らぬあの男だけでなく、私からも侮辱されたと感じているのだ。私も又、同じ男だからである。だが、私自身も侮辱されたではないか。」⁽¹⁹⁾

「私自身も侮辱されたではないか。」という訴えも虚しく、夜陰の色情狂と「私」は覗く者と覗かれる者の立場の相異を超えて、内に同じひとつの欲望を隠し持つ人間として浮かび上がってくる。いまや、色情狂、「私」、都市の住人達は全て一色に塗り潰されてしまう。彼らは服装、挙措に於てのみならず、その内的情熱によっても、同一の存在であることが示されるのである。

* * * *

こうして、『獣の呪い』では、都市の画一的な性格が描出されている。作者は、扉、壁、レストラン、街路を描きつつ、これら都市の個々の道具立てには長く踏み留まらない。彼は常に、それら相互の類似性に関心を向けている。そして、都市に生を営む人間達の無特性性を見据え、彼らの自己喪失の実態を浮き彫りにせんとする。この時、都市はロシアの一都市ではなく、巨大で象徴的な宇宙空間へと膨れあがる。こうした作者の意図は、「私」（主人公＝語り手）、「彼女」（その恋人）、「都市」に具体的な名称が付与されていないこととも無縁ではないだろう。

『獣の呪い』で描かれた都市像は、1902年に発表された作品『都市』（《ГОРОД》）にも見られる。『都市』はやはり、特定の都市ならぬ都市一般、即ち都会の実態を問題にした作品である。主人公ペトロフはある「巨大な都市」の住人で、銀行に勤務している。彼は、年に一度ワシリエフスキ家の集いで顔を合わせるひとりの男に、何気なく関心を寄せ始めた。ペトロフの関心は、このささやかな習慣を通して徐々に強まってゆく。しかし、種々の行き違いと、そして何よりも彼の関心が今ひとつ積極的なものとならないことの為に、彼は相手の姓名すら知らぬままに過ごす。二人の男の交際はそれ以上に進展することもなく、やがて年一度の習慣も絶えて、ペトロフはこの無特性な男を都市の雑踏の中に見失ってしまう。そして、この男の存在を通して、都市の無表情な事象、主人公ペトロフを含む孤独な都市生活者達の姿が彷彿としてくるのである。

都市の生理学はアンドレーエフの作品に限らず、特にロマン主義以降、十九世紀の世界文学に於て広く取り上げられたテーマであった。しかし、それらの作品とは異なって、『獣の呪い』では、都市の人間は職業や身分階級によって彩色されてはいない。飽く迄、個々の具体的な事情を超えた共通の性格、人間相互の双生児の如き類似に於てのみ捉えられている。そして、まさにここに、アンドレーエフ独自の手法が認められるのである。

〈画一性〉及び〈特性喪失〉の面から人間存在を描出せんとするアンドレーエフの手法——これは都市の物語『獣の呪い』に顕著に現われているが——は、別種の題材を扱った『赤い笑い』、『深淵』等にも認められ、彼の創作活動に於てある程度持続的なもののように思われる。そして、それは、伝統的な写実主義の描写法から離れてモダニズムの流れに向かうアンドレーエフ文学の軌跡を示しているとも言えよう。

《注》

- (1) Slonim, M., *From Chekhov to the Revolution. Russian Literature 1900-1917*, New York, 1962, P.177
- (2) これまでに刊行されたアンドレーエフの主な作品集としては、次のものがある。
 - ① Андреев Л. Собр. соч. в 17-ти томах. С.-Петербург (тт. 1-13, т. 15) и Москва (т. 14, т. 16, т. 17). 1910-1917.
 - ② Полное собрание сочинений Леонида Андреева в 8-ми томах. С.-Петербург, 1913.
 - ③ Андреев Л.Н. Избранные рассказы. М., 1926.
 - ④ Леонид Андреев. Повести и рассказы. М., 1957.
 - ⑤ Леонид Андреев. Повести и рассказы. в двух томах. М., 1971.
 - ⑥ Леонид Андреев. Рассказы. М., 1977.
 - ⑦ Леонид Андреев. Избранное. Горький, 1979.

* 上記のうち、1913年以前のアンドレーエフの作品に関しては、②が最も完備したものとされている。筆者はこれらの中、②、⑤、⑥、⑦を参照した。
- (3) アンドレーエフは1898年に《Баргамот и Гараська》により作家としてデビューして以来、数多くの作品を発表して時代の寵児となった。特に1906-1908年は、彼が質・量の両面で旺盛な筆力を振った時期であった。1906年には一連の戯曲群の序章ともなった《Жизнь человека》がベルリンで書かれ、1908年には彼の代表作《Рассказ о семи повешенных》が文集 Шиповник に発表されている。
- (4) 『獣の呪い』の考察にあたり、テキストとして、下記の二つを参照した。
 - Полн. собр. соч. Леонида Андреева в 8-ми томах. С.-Петербург, 1913. т.8. (本稿 注(2)・②を参照のこと。)
 - Андреев Л. Проклятие зверя, (PRIDEAUX PRESS) England, 1976.

* 猶、本小論での引用は全て、前者に依る。
- (5) 主要な参考文献は以下の通りである。
 - Иезуитова Л.А. Первый рассказ Леонида Андреева. —《Русская литература》, 1963 II, стр. 183-187.
 - Литературное наследство. т.72. Горький и Леонид Андреев. М., 1965.
 - Гужиева Н.В. Драматургия Леонида Андреева 1910-х годов. —《Русская литература》, 1965 IV, стр. 64-79.
 - Woodward, J.V., *Leonid Andreyev*, London, 1969.
 - Книга о Леониде Андрееве. Воспоминание. England, 1970. (First published:1922)

- Чуваков В. Вступительная статья к кн.: Л. Андреев, Повести и рассказы в двух томах. М., 1971.
- Иезуитова Л.А. Леонид Андреев. «Бунт на корабле».
—«Русская литература», 1971 Ш, Стр. 128-138.
- King, H.H., *Dostoyevsky and Andrejev. Gazers Upon The Abyss*, New York, 1972.
- Григорьев А.Л. Леонид Андреев в мировом литературном процессе.
—«Русская литература», 1972 Ш, стр. 193-201.
- Иезуитова Л.А. Творчество Леонида Андреева (1892-1906). Л., 1976.
- Михайлов О. Вступительная статья к кн.: Л. Андреев. Рассказы. М., 1977.
- Баранов В.И. Послесловие к кн.: Л. Андреев. Избранное. Горький, 1979.
- メレジコーフスキイ著『文芸論』, 山内封介訳, 第一書店, 1933年。
- コリン・ウィルソン著『夢見る力』, 中村保男訳, 竹内書店新社, 1968年。
- 黒田辰男監修『20世紀ロシア文学年譜』第1・2巻, 東宣出版, 1973年。

(6) アンドレーエフは1905年の革命の際に外国へ逃避し、その後ドイツ、スイス、イタリア等で生活した。その間、1906年に、最初の妻に死別するという悲しい体験をしている。1907年春 傷心を抱いてロシアへ帰還した彼は、ペテルブルグにて創作を開始するが、1908年春にはアパートをひき払って、永住の地フィンランドに出立する。

(7) Полн. собр. соч. Леонида Андреева в 8-ми томах. С.-Петербург, 1913. т.8, стр. 114. (以下、引用部分には縦二重線を付す。)

(8) Там же, стр. 122.

(9) Там же, стр. 116.

(10) Там же, стр. 117-118.

(11) Там же, стр. 118.

(12) Там же, стр. 118-119.

(13) Там же, стр. 120-121.

(14) Там же, стр. 121.

(15) Там же, стр. 122.

(16) Там же, стр. 135.

(17) Там же, стр. 136-137.

(18) Там же, стр. 139.

(19) Там же, стр. 139.

付記。本小論脱稿後、東大露文研究室の栗原成郎先生の御好意により、下記の書を参照することができた。ここに記して感謝したい。

- 昇曙夢訳『獣の呪ひ』—「アンドレーエフ傑作集」、大倉書店、1920年。